

## 『日本における鷹狩の歴史と、東北の鷹狩について』

作成者 谷山 宏典

東北の鷹狩の伝統を受け継ぐ松原英俊氏のことを知るには、日本における鷹狩の歴史や、東北地方に広がった鷹狩の「特殊性」を理解する必要がある。以下にその概要をまとめた。

【『鷹と生きる 鷹使い・松原英俊の半生』（谷山宏典・著／山と溪谷社）より抜粋・編集】

### 1 日本における鷹狩の歴史

その起源は古く、世界を見渡せば、紀元前までさかのぼる。発祥は中央アジアから西アジア周辺ではないかと考えられており、五〇〇〇年以上も前の壁画にも鷹狩の様子が描かれている。

日本における鷹狩のもっとも古い記録は『日本書紀』で、仁徳四十三年（三五五年）仁徳天皇が鷹を使って多くのキジを捕ったとある。その鷹を調教したのは百済の帰化人・酒君（さけのきみ）だということから、日本の鷹狩文化は大陸から伝えられた文化のひとつであったことがうかがえる。

その後、鷹狩は歴代の天皇たちに愛好され、朝廷には鷹を管理・訓練・保護する部署が設けられた。鷹専門の部署は、時代によって「鷹甘部（たかかいべ）」「主鷹司（しゅようし）」「放鷹司（ほうようし）」などと名称を変えていくが、その時どきの権力者に雇われて鷹専門の部署で訓練などにあたっていたのが鷹飼（鷹匠）と呼ばれる人々であった。

やがて武士が台頭するようになると、天皇や貴族たちに代わって、武士たちの間で鷹狩が広まる。特に戦国時代、織田信長、豊臣秀吉、伊達正宗、徳川家康など諸国の戦国大名が鷹狩を好んだ。信長は民情視察のために鷹狩を行ない、秀吉は諸大名に鷹を献上させ、その鷹を捕らえる山を鷹取山、巢鷹山、鷹巢山、御巢山などと命名し管理させた。徳川家康は生涯鷹狩を愛し、七五歳で亡くなる直前まで鷹狩に出ていたことが知られている。

江戸時代になると、将軍の代替わりによって鷹狩は盛衰を繰り返す。五代将軍綱吉は放鷹禁止令や生類憐みの令で鷹狩を禁じたが、八代将軍吉宗は鷹狩を解禁し、その制度を整備した。将軍家で飼育する鷹を登録する御鷹帳を作ったり、千駄木や雑司ヶ谷などに鷹を飼育する御鷹部屋を設置したのも吉宗の時代である。幕府によって鷹狩は全国的に制度化され、管理された。鷹の保持が認められたのは幕藩領主階級のみであり、将軍や大名のために鷹を飼養・管理・訓練したのも鷹匠や鷹師（鷹匠頭）であった。彼らは将軍や大名に禄をもらって召し抱えられ、その職は世襲制だった。

日本での鷹狩は、長らく権力と寄り添うものであった。しかし、江戸幕府が倒れると状況は一変する。将軍や大名、上級武士のみの特権だった鷹狩が、明治維新以降には民間人でもできるようになったのだ。その結果、近代以降の日本には二つの鷹狩の潮流が生まれることになる。

ひとつは江戸幕府の鷹狩文化を受け継ぎ、鷹の飼養・訓練を行なった「鷹匠」の流れ。もうひとつは、おもに東北地方の農民や猟師たちの間で発達したクマタカを使った鷹狩を行なう「鷹使い」である。

前者は明治政府内の宮内省が、古技保存の一環として鷹狩文化を保護したことにはじまる。浜御殿（現・都立浜離宮恩賜庭園）や新宿御苑などに鴨池を開設し、それらの鴨場を管理し、鷹狩用の鷹を訓練するために多くの鷹匠が雇用された。しかし昭和の中ごろ、宮内庁（元・宮内省）は鷹による実猟を中断し、皇室の鷹狩の伝統は途絶えてしまう。その代わり、宮内庁を退職した人々が、受け継がれてきた鷹匠の技法を民間に伝えた。現在、日本放鷹協会や諏訪流放鷹術保存会をはじめ、伝統的な鷹狩技法を保存・伝承しようという団体がいくつか存在するが、それらのほとんどは以上の系譜の中にあると見ていいだろう。

かたや、農民や猟師による鷹狩は、伝統文化や古技保存というより、純粋に獲物を捕るための仕事として発展していった。彼ら鷹使いが全国にどれほど存在し、いつごろ隆盛を極めたかは不明であり、文献も乏しい。かろうじて東北地方の鷹使いに関してはいくつかの文献や伝承が残っており、足跡をたどることができる。

## 2 東北地方の鷹狩について

東北地方の農村部の鷹狩は、起源は定かではなく、東北の武士たちの鷹狩が土着化したものではないかと言われている。なぜ將軍や大名たちが好んだオオタカではなく、クマタカによる鷹狩だったのかといえば、江戸時代オオタカの使用は身分の高い人たちに限られ、身分の低い武士たちはクマタカを使って狩りをしており、そのクマタカによる技法が明治以降農村にも伝わったからではないかという説がある。

たとえば、『秋田マタギ聞書』には「殿様階級はもっぱら弟鷹（小柄な鷹）をしようしたもので、（中略）家来たちにその飼養は許されなかったのである。それで家来たちは殆んどウサギ捕専門である角鷹（躰の大きいもの）を養ったのであった」とあり、『秋田県史』には「雲雀や雉子や鴨を捕らえる弟鷹は、特定の士以外には飼えなかったが、ウサギを捕える角鷹は一般に飼うことができた」とある。

東北の鷹使いの記録は、おもに秋田県南部と山形県北部に集中している。松原が弟子入りした老鷹匠・沓沢朝治も山形県と秋田県の県境近くの山形県最上郡真室川町に暮らしていた。鷹狩が盛んだった地域のひとつ、秋田県雄勝郡羽後町では昭和五年ごろから昭和十五年ごろにかけて鉄砲撃ちを上回る二五、六人の鷹使いがいたという。

なぜ東北地方で鷹狩が発展したかについては、いくつかの要因がある。ひとつは、雪に閉ざされる冬の間の動物性タンパク質を得るために、鷹狩でウサギを捕っていたということ。ふたつめは、当時は炭焼きなどの重労働で得るお金よりも、ウサギを売ったほうが効率がよかったということ。一九三五（昭和十）年ごろでウサギ一匹の肉が七、八〇銭、毛皮が一五銭、計一元ほどで取引されていた。村役場職員の月給が二八円、米一俵が五円であったこの時代、上手な人でひと冬に平均して二〇〇羽前後、多いときで三〇〇羽のウサギを捕ることができた鷹狩は「儲かる仕事」だったわけだ。

秋田県雄勝郡羽後町の鷹使い・武田宇市郎の言葉を聞き書きした『聞き語り 最後の鷹匠』には「親父もタカを飼っていた。田んぼをやりながら、冬になると雪山に出て、捕ったウサギを売って生計を立てていた」「親父の時代は、ウサギを捕らないと暮らしていけなかった。ウサギ一匹で、おとなの日当分ぐらいになったからな。炭焼きよりも倍以上も割がよかったよ」（原文ママ）と語られている。

三つめの要因は、猟のための道具として鉄砲には税金がかかったのに対して、鷹は無税だったことがある。鉄砲の免許税の金額は最低でも一五円。さらに鉄砲を購入するには村田銃で一七円、元折単発式銃で二二円、二連銃で一二〇円と費用がかかり、大きな負担となっていた。対して鷹は購入しても五、六円。しかも射程区間の制限があり、使用に習熟を要する鉄砲に比べて、鷹は狩りがしやすく、鉄砲の三倍は獲物をとったそうだ。

しかし、昭和中ごろになると鉄砲の性能の向上にともない、鷹よりも鉄砲のほうが効率的に猟ができるようになった。さらに経済状況が変化したこともあって、鷹狩は徐々に割の合わない仕事となり、東北の農村では

冬の間は出稼ぎに出る者が増えていった。

ともに「最後の鷹匠」と呼ばれていた、山形県最上郡真室川町の沓沢朝治（一八九六～一九八三年）と秋田県雄勝郡羽後町の武田宇市郎（一九一五～一九九二年）が鷹を使いはじめたころは同じ村内に数人の鷹使いがいたが、彼らの晩年には、自分たち以外はひとりもいなくなってしまった。そして彼らの没後は、沓沢のもとで学んだ松原が東北地方の鷹狩の伝統を受け継ぐ最後のひとりとなってしまったのだ。

かつて、鷹匠と呼ばれた人たちはときの権力者のために鷹を訓練することが仕事であり、それで生活の糧を得ていた。東北地方の鷹使いたちは春から秋にかけて農業を行ない、冬場の農作業ができないときは鷹狩で獲物を捕り、それを売って収入を得ていた。歴史的に見れば、鷹匠や鷹使いが仕事として成り立っていた時代はたしかにあった。

しかしその後、仕事としての鷹匠や鷹使いが存在できなくなると、鷹狩の意味も変わってきた。天皇や将軍などに愛好されてきた鷹狩の流れをくむ人々は、主として伝統文化の保存を目的に鷹狩技法を継承している。諏訪流放鷹術の鷹匠・大塚紀子はその著書『鷹匠の技とこころ』の中で「私にとって『鷹匠』という言葉は、長い伝統をもつ『文化の伝承者』であるように感じられる。鷹匠とは、鷹狩という文化が保護され愛好されていた時代の人々の思いと、鷹匠たちのこころを、未来に伝える役割を持っているからである」と書いている。

東北の鷹使いたちは、生活のための鷹狩が成り立たなくなると廃業をするか、遊猟としての狩りに移り変わっていった。沓沢朝治は「おれは鷹が好きでクマタカを使っているわけだがな」（『鷹匠 沓沢朝治翁の記録』）と語り、武田宇市郎は「終戦後、山も昔と変わり、ウサギも少なくなり、タカ使いでは生活できなくなり、只猟に出て遊び楽しむばかりとなりました」（『聞き語り 最後の鷹匠』）と語っている。また、一九七七年に羽後町で「鷹匠を育てる会」が発足すると、武田は会の有志とともに鷹狩文化の保存に努め、一九八一年に同じ羽後町の土田一が祖父や父親の跡を継いで鷹使いになることを宣言すると、後継者育成のために毎週のように山に入って鷹狩技法を伝えていた。しかし、八三年に武田の鷹と土田の鷹が相次いで死亡すると鷹狩の存続は困難となり、八六年に武田は廃業宣言をして、「鷹匠を育てる会」も解散した。

\* \* \* \* \*

補足／松原は、一九七四年に沓沢朝治に弟子入り。翌七五年に独立し、山中の小屋で鷹（クマタカ）一羽、人間一人の生活を送りながら、独自に鷹狩の技術を磨き、七九年はじめての獲物を手にする。

『鷹と生きる 鷹使い・松原英俊の半生』  
谷山宏典・著  
山と溪谷社・刊 2018年

以上

